

雨の歩幅

能村 研三

綱渡りの一年

もう一年を振り返る季節になってしまった。

昨年の今ごろはコロナの感染状況もやや下火になっていた頃で、延び延びになっていた「沖」の創刊五十周年記念大会を、一月に新年大会も兼ねて実施しようと計画を始めた。ところが年が変わる頃から第六波が押し寄せ、一月下旬の大会の実施を延期せざるを得なくなった。

次の実施時期をいつにするかの判断に迫られたが、中々感染者が減少に至らず、先延ばしをするしかなかった。

先師登四郎の忌日である五月二十四日あたりで大会を開催しようと、五月の二十二日を選び準備に入った。幸い感染者数は減少傾向にあったが、内輪のささやかな会とし、会員と共に記念すべき五十周年を祝うことができた。

この大会に花を添えてくれるのかのように、句集『神鵲』で「俳句四季特別賞」を戴くことになった。こち

宵闇や灯さず過ぐる貨車の列
雨の日は雨の歩幅や蓼の花
曼珠沙華白にも毒の淡からず
秋風を聞くに適へる耳かたち

風紋の秋風なりに流れをり

忠敬と芭蕉の蹠秋澄めり

鳴り急ぐ秋の風鈴はづしけり

度忘れの一語蓮の実飛びにけり

槍投げの力が声に雁渡し

田終ひの煙が目安夕歩き

らは七月七日、俳句四季の「七夕まつり」で二年ぶりの俳壇交流の機会を得た。その翌日に安倍元首相の銃撃事件があり、世の中に不穏を与える前の日の実施であった。

今年はまだ講演の依頼が多かった年で、春には俳人協会の「第一句集を読む・上田五千石の『田園』」秋には松山の子規記念館で「子規の房総の旅」について話をした。この子規の房総の旅については夏休みの数日間をかけて実地取材をしたことも楽しかった。十一月十三日には宮城県の「松島芭蕉祭」、十九日には長野県信濃町の「一茶忌俳句大会」での講演が控えている。

十月二十三、二十四日には「青森支部発足記念大会」を実施、全国の会員と共に祝いできたことも嬉しかった。

コロナ禍の様々な制限がありながらも、綱渡りをしながら実りある行事ができたことはよかった。

能村 研三